

令和2年度スポーツ庁委託事業

Special プロジェクト2020

「特別支援学校等を活用した地域における障害者スポーツの
拠点づくり事業」成果報告書

令和3年3月
青森県教育委員会

本報告書は、スポーツ庁の委託事業として、青森県教育委員会が実施した「令和2年度 Special プロジェクト2020（特別支援学校等を活用した地域における障害者スポーツの拠点づくり事業）」の成果を取りまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用等にはスポーツ庁の承認手続きが必要です。

1 地域が有する課題の状況

本県は、2026年の国民スポーツ大会・全国障害者スポーツ大会青森大会の開催が内定し、障害者スポーツへの関心が高まっている。それに合わせて、令和元年度に「青森県特別支援学校スポーツ連盟」を設立し、全ての障害のある児童生徒が、学校教育段階から生涯を通じてスポーツに親しむ態度を育成するための環境の充実が図られてきているところである。

県教育委員会では、平成31年2月に「青森県特別支援教育推進ビジョン」を策定し、基本方針において、障害のある児童生徒が、地域社会において、生涯を通じて教育やスポーツ、文化活動等に親しむことができるようにするため、地域人材を活用し、地域における活動を充実させるとともに、特別支援学校間のスポーツ・文化活動による交流を行い、生涯学習の基盤づくりに努めることを定めた。

また、各県立特別支援学校では、これまでも障害者スポーツ等を学習の中に取り入れるなど、児童生徒のスポーツに親しむ機会を積極的に設けてきている。しかし、休日や卒業後の生活に視点を移すと、スポーツに取り組む者はごく一部であることが報告されるなど、学校での取組が日々の生活につながっていない状況がうかがえる。

そこで、本県では、県立特別支援学校に在籍している児童生徒の生涯を通じて継続的にスポーツに親しむ意識の向上を図ることと障害のある児童生徒が地域においてスポーツに親しむことができる環境づくりを目標に掲げ取り組むこととした。

これらを効果的に推進するため、県教育委員会ではスポーツ庁の委託事業を活用することとしたものである。

2 事業実施の目的、基本的事項

(1) 目的

県立特別支援学校に在籍している児童生徒の生涯を通じて継続的にスポーツに親しむ意識の向上を図るとともに障害のある児童生徒が地域においてスポーツに親しむことができる環境の整備等を図る。

(2) 実施体制

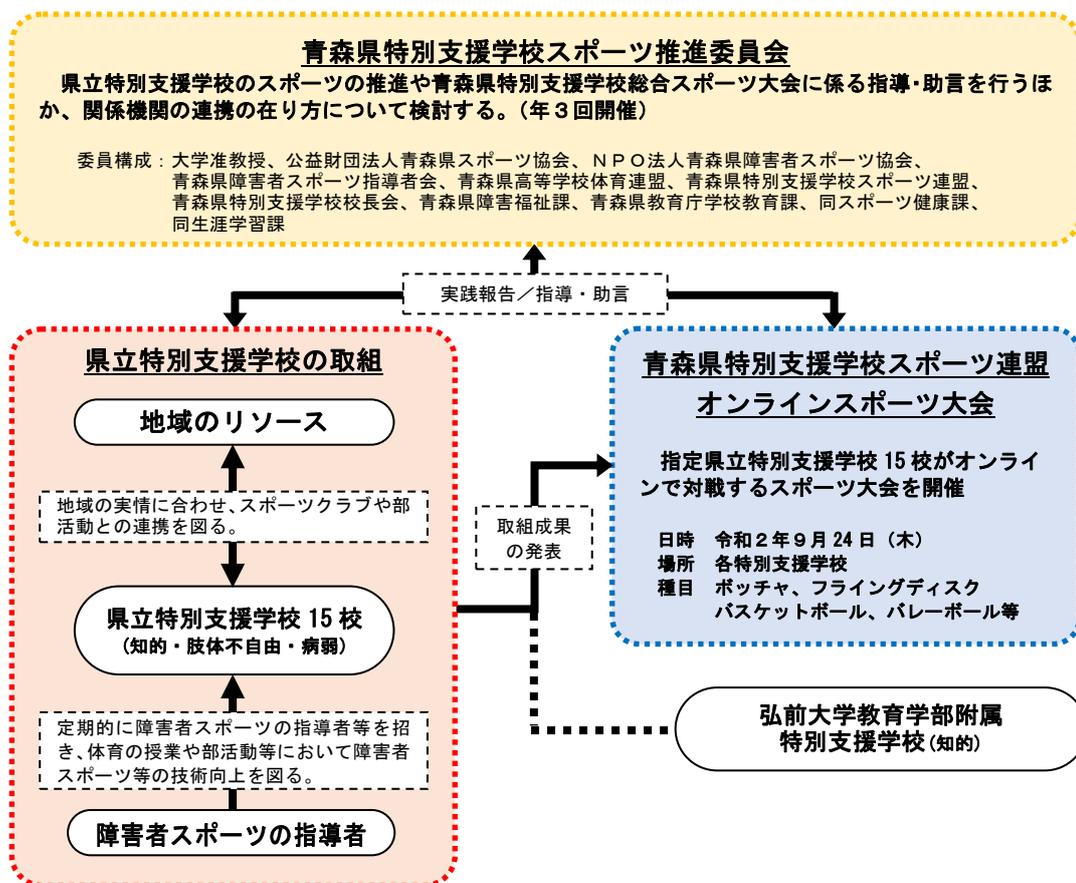
- ① 「青森県特別支援学校スポーツ推進委員会」を設置し、特別支援学校におけるスポーツ推進及び地域における生涯学習の基盤づくり、並びに「青森県特別支援学校スポーツ連盟総合スポーツ大会」の運営に関する指導・助言を行う。
- ② 各特別支援学校の取組として定期的（年3回程度）に障害者スポーツの指導者等のスポーツの専門家を招き、体育の授業や部活動等において、障害者スポーツ等の楽しさを味わうとともに技術向上を図る。
- ③ 特別支援学校に在籍する児童生徒の夢や志の実現の場として、対象校15校が各校にいながらにして参加する、青森県特別支援学校スポーツ連盟オンラインでスポーツ大会を開催する。

(3) 検討事項

- ① 学校教育における、障害者スポーツ等の振興に係る地域連携の在り方について
- ② 「青森県特別支援学校スポーツ連盟オンラインスポーツ大会」の効果的な実施について

(4) 実行委員会（推進委員会）の構成

学識経験者、スポーツ振興団体、関係部局、特別支援学校関係者等



3 事業内容

(1) 特別支援学校におけるスポーツ推進及び地域における生涯学習の基盤づくり

① 方法

- ・ 県立特別支援学校 15校を指定校とし、障害者スポーツの指導者を招き、体育の授業や部活動等において障害者スポーツ等の技術向上を図る。

(県内講師 1名 * 2時間 * 3回)

- ・ 地域スポーツクラブ等との連携を図り、学校施設を活用するなど、児童生徒の積極的なスポーツの参加を促し、生涯スポーツの基盤づくりに努める。
- ・ スポーツの種類、連携する機関等については、地域の実情に応じて各校が定める。

② 各校の取組

ア 本県の指定県立特別支援学校の現状と課題

本県の指定県立特別支援学校の現状と課題は以下のとおりである。

(Table. 1)

Table. 1 主な現状と主な課題

○現状	△課題
○体力の向上や運動習慣の定着、健康の保持増進を目標に、障害の状態や発達の段階等に応じて体育等の学習活動が行われている。	△運動に対し、積極的に取り組む生徒と消極的な生徒に二極化している。
○学校間交流や運動会等において障害者スポーツを取り入れ、児童生徒の関心も高まってきている。	△家庭において体を動かしたり、障害者スポーツに取り組んだりする経験が少ない。
○中学部、高等部の生徒が小学部の児童にボッチャ等を教える機会を設定している。	△卒業後にスポーツに親しむ機会や場所が少ない。
○スポーツに関する部活動に積極的に取り組んでいる。	△スポーツに親しむ意欲が低かったり、体力不足だったりする。
	△競技スポーツとして取り組める生徒への指導が十分ではない。
	△地域のスポーツクラブ等の利用につなげるなど、スポーツ活動を継続できるよう支援する必要がある。

イ 目指したい地域スポーツ活動の充実及び生涯学習の基盤づくり

本取組を通して、各校では以下のような効果を期待している。(Table. 2) 基本的には特別支援学校に在籍している児童生徒の卒業後のスポーツを通じた生涯学習の基盤づくりへの効果を期待しているものであるが、このような取組を目指すことが、地域のスポーツ活動の充実につながるとともに、地域のスポーツ活動の充実が特別支援学校に在籍している児童生徒の卒業後の充実した生活につながるといった相乗効果をもたらすことを期待して取り組んでいる。

Table. 2 本取組で期待する効果

<ul style="list-style-type: none"> ・授業や部活動における練習等で技術を身に付け、大会参加等により味わった達成感や楽しさが卒業後のスポーツ活動の基盤になるのではないかな。 ・プロスポーツチームの選手に触れることで、競技に関心をもち、観戦や応援等、スポーツへの関わり方が広がるのではないかな。 ・地域のスポーツクラブの指導者を招聘することで、地域スポーツとの出会いとなり、地域のスポーツクラブ等への参加意欲が高まるのではないかな。 ・保護者に対して情報提供をすることで家庭でスポーツに親しむ環境づくりにつながるのではないかな。 ・授業等において地域の専門的知識をもった指導者の指導を受けることで、体を動かすこと、スポーツをすることの楽しさや喜びを感じ、余暇の充実や生活にスポーツを取り入れようとする意欲の育成につながるのではないかな。 ・小学部段階から障害者スポーツに親しむ環境をつくることで、障害者スポーツ大会等へ参加する意欲の育成につながるのではないかな。 ・大会への参加や参加を目指して取り組むことで、技術が向上するとともに、スポーツの楽しさを味わい、スポーツに親しむようになるのではないかな。 ・家庭や地域などの身近な場所で運動や各種スポーツができる環境を整えることが、児童生徒だけではなく、地域の方々の健康と生きがいにもつながり、生涯スポーツの推進につながるのではないかな。
--

ウ 各校の取組内容

各県立特別支援学校が連携した機関等の内訳は、Table. 3のとおりである。地域のスポーツクラブとの連携を図っている学校が8校で、卒業後の生活を見据えて、将来利用できるスポーツクラブ等につなげていきたいといった考えの下に連携を進めている様子が見えられた。

また、その他については、ダンスクラブやヨガ教室など、競技スポーツではないが、気軽に体を動かすことができる施設と連携しており、生活に直接結びつくような取組となった。

Table. 3 主な連携機関

連携機関	実施校数（複数回答可）
地域のスポーツクラブとの連携	8校
地域の福祉機関との連携	4校
地域の小・中学校・高等学校の部活動との連携	1校
地域の他の特別支援学校との連携	1校
地域の町内会・老人会等との連携	1校
その他	7校

実施した場所については、一部他校の施設、地域の施設を利用して取り組んでいるケースもあったが、ほとんどは自校の施設で実施していた。

また、招聘したスポーツの指導者等の所属する機関はTable. 4のとおりである。今年度は障害者スポーツ関連団体に加え、プロスポーツチームの選手又は指導者等を招聘し、プロスポーツに触れる機会を設定する学校が多かった。また、地域の資源の活用と環境づくりを見据えて、競技スポーツに拘らずに地域のダンススタジオのスタッフなど、楽しく体を動かすことを目指した取組も多かった。

Table. 4 招聘指導者所属機関一覧

機関分類	具体的機関名
障害者スポーツ関連団体	<ul style="list-style-type: none"> ・青森県障害者フライングディスク協会 ・青森県障害者スポーツ指導者会 ・青森県ボッチャ協会 ・青森県障害者スポーツ協会 ・青森スポーツクラブWandaji
地域統合型スポーツクラブ	<ul style="list-style-type: none"> ・Hachinohe Club
プロスポーツチーム	<ul style="list-style-type: none"> ・青森ワッツ ・ブランデュー弘前FC ・ヴァンラーレ八戸
教育機関	<ul style="list-style-type: none"> ・東北女子大学 ・青森大学新体操部 ・県立八戸西高等学校陸上競技部
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・MATSURI SPORTS DAYS（ヨガ教室） ・エアロビクス教室 ・鮫TTC（卓球クラブ） ・ステップエアロビクス ・花嵐桜組（よさこいダンスチーム）

エ 生徒の変容

各校とも豊富な経験と優れた技術をもった指導者や講師の方々の基礎基本の指導や児童生徒の実態に合わせた指導により、技術の向上やスポーツが有する楽しさや喜びを味わうことができ、運動を不得意とする児童生徒も笑顔で取り組む様子がみられた。特にエアロビクスなどこれまで経験したことがないことに挑戦したことは、体を動かすことの楽しさや爽快感を味わうことができ、児童生徒の体を動かすことの知識を深めることにもつながった。

また、それぞれの指導者や講師の方から、繰り返し練習することや毎日続けることの大切さを聞き、家庭等において運動を取り入れようとする児童生徒もみられた。

一部の学校では、フライングディスクの的までの距離を自分で調整して遠くの距離に挑戦してみたり、下級生や下学部の児童生徒にアドバイスをしたりするなど、自ら技術の向上を目指して段階的に取り組んだり、学んだことやできるようになったことを他者に伝えようとする様子もみられた。

児童生徒の感想の中には「〇〇が楽しい。」「もっとやりたい。」などといった意欲の向上がうかがえる感想や「フライングディスクがまっすぐ飛ぶようになった。」「シュートの成功率が上がった。」「去年よりも上手にできた。」など、技術の向上を自ら感じているような感想が多くみられた。また「プロ選手のようにサッカーがうまくなりたい。」など憧れを抱き、技術の向上を目標にしようとするのがうかがえる感想がみられた。

一方で少数ではあるが、「運動やスポーツが好きになれなかった。」といった感想もみられた。

オ 地域スポーツ活動の充実と生涯学習の基盤づくりについて

本事業の取組によって、各校とも様々な機関とのつながりを構築できたことは、特別支援学校に在籍している児童生徒がスポーツを通して地域とかかわっていくためのきっかけになったとともに、今後の基礎づくりとなった。

また、学校からは、取組を地域に情報発信することは、特別支援学校に在籍している児童生徒の理解の促進につながるため、今後も積極的に発信していきたいといった意見がみられた。

一方で、学校教育段階での取組をどのように地域につなげていくのかについての具体的取組が課題であると捉えている学校が多かった。

(2) 青森県特別支援学校スポーツ連盟オンラインスポーツ大会の開催

① 経緯

昨年度、県立特別支援学校(知・肢・病)の15校を対象に青森県特別支援学校総合スポーツ大会(プレ大会)を開催した。

今年度は、第1回大会を開催する予定で計画を進めていたが、新型コロナウイルス感染症の感染予防の観点から、参集型のスポーツ大会の開催は難しいと判断

した。しかし、これまで各校で生涯スポーツの基盤づくりとして、様々なスポーツに関する取組を行ってきたこと、学校によっては部活動に積極的に取り組み、生徒の日々の取組の成果を発揮する場を設けたいとの思いから、様々な方法について検討し、最終的にインターネットを活用してのオンラインスポーツ大会の開催を決定した。

② オンライン大会に向けての諸準備

Web会議システムの活用は、これまでも交流及び共同学習等で学校間をつないで行ってきた経験はあったものの、今回のように体育館で動きのある活動場面を一度に複数校つなぐことは、初めての取組だった。そのため、各校で共通したイメージをもつことが難しかった。また、今回は、Zoomを活用したが、ツールの操作について慣れるまでに試行錯誤を繰り返した。さらに、オンラインに使用する機器の整備から大会開催までの時間の余裕がなかったこともあり、各校の教員や生徒に対して十分な説明をすることができず、担当者にかかる負担が大きかった。

一方で、今回、使用する機器や接続方法など各校のインターネット環境をある程度同様にすることができた。そのため、それぞれの学校で生じたトラブルについて共有することができたり、基本操作等について、共通のマニュアルで対応したりすることができた。

大会開催に向けて、競技実施時間と同じ時間帯でのシミュレーションを複数回実施し、機器の操作や画面切り替え等、詳細に調整を繰り返した。

③ 大会概要

令和2年9月24日(木)弘前大学教育学部附属特別支援学校を含む県内13校の特別支援学校をインターネットでつないだ「青森県特別支援学校スポーツ連盟オンラインスポーツ大会」を開催した。

ア 実施競技

実施競技は、前年度のプレ大会で実施した競技を基本として、オンラインでの対戦が可能な競技を検討し、バレーボール、バスケットボール、フライングディスク、ポッチャとした。いずれの競技もルールをオンライン大会用に変更して実施した。(Table. 5)

Table. 5 オンライン競技と主なルール

オンライン競技名	主なルール
オンラインバレーボール	<ul style="list-style-type: none"> ・3人1組のパスラリー ・制限時間1分間 ・パスの合計で競う
オンラインチャレンジポッチャ	<ul style="list-style-type: none"> ・肢体不自由クラスとそれ以外のクラス分け ・5人1チーム ・八角的を使用しての点数制 ・1人5球(肢体不自由クラスは3球)で5人全員の合計得点で競う
オンラインフライングディスク アキュラシー	<ul style="list-style-type: none"> ・5人1チーム (4人は距離5m、1人は距離7m) ・1人4投で5人全員の合計得点で競う
オンラインバスケットボール	<ul style="list-style-type: none"> ・5人1チームのフリースロー ・1人2本で5人の合計本数で競う

その他、各校でのこれまでの取組を踏まえ、陸上競技（30m走・50m走）、サッカー（シュート及びリフティング）については、期間を設定し、事前に記録を測定した。上位記録者については、オンライン大会当日に映像と共に紹介し、表彰した。また、チャレンジ競技としてチャレンジバレーボール、チャレンジポッチャ、チャレンジフライングディスク、チャレンジバスケットボールを設け、成功回数等に応じて級認定をした。（Table. 6）

Table. 6 事前記録競技と主なルール

競技名	主なルール
陸上競技	<ul style="list-style-type: none"> ・ 30m走、50m走の個人競技 ・ それぞれの距離に以下のクラスを設定 ①知的 ②上肢・下肢・体幹（機能障害等） ③脳原性疾患 ④車いす ・ オンライン大会当日にランキング発表
チャレンジサッカー	<ul style="list-style-type: none"> 【シュートコース】 ・ 個人競技 ・ ゴールまでの距離5mと10mの2クラス ・ 1人5本でゴール数に応じて級認定 【アスリートコース】 ・ 個人競技 ・ シュート距離15m及びリフティング シュート：5本 リフティング：3回の最高回数 ・ ポイント制にしてランキング付け ・ オンライン大会当日にランキング発表
チャレンジバレーボール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 個人でのパスラリー ・ 1分間の合計回数で競う ・ 合計回数に応じて級認定
チャレンジポッチャ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 個人競技 ・ 肢体不自由クラスとそれ以外のクラス分け ・ 八角的を使用しての点数制 ・ 1人5球（肢体不自由クラスは3球）で合計点数に応じて級認定
チャレンジフライングディスク	<ul style="list-style-type: none"> ・ 個人競技 ・ 距離3m（ディスリート3）、距離5m（ディスリート5）の2クラス ・ 1人10投でゴール通過回数に応じて級認定
チャレンジバスケットボール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 個人でのフリースロー ・ ゴールの高さ、距離等でクラス分け （260cm、305cm、車椅子） ・ 1人10本のフリースローでゴール数に応じて級認定

※級認定の競技は、後日各個人に認定証を配布した。

イ 参加人数

当日は137人の生徒がオンラインで対戦した。また、723人の生徒が事前に記録を測定した。（Table. 7）その他、オンライン競技については、各競技実施後に各競技団体等の代表者に講評を依頼した。（Table. 8）

Table. 7 参加状況

	競技名	人数
オンライン競技	オンラインバレーボール	15人 (5チーム)
	オンラインチャレンジボッチャ	48人 (11チーム)
	オンラインフライングディスクアキュラシー	45人 (9チーム)
	オンラインバスケットボール	29人 (5チーム)
	オンライン競技合計	137人
事前記録競技	陸上競技	84人
	チャレンジサッカー	148人
	チャレンジバレーボール	10人
	チャレンジボッチャ	173人
	チャレンジフライングディスク	209人
	チャレンジバスケットボール	99人
	事前記録競技合計	723人
	参加人数合計	860人

Table. 8 各競技講評者一覧

競技名	講評者所属団体名
オンラインバレーボール	青森県バレーボール協会
オンラインチャレンジボッチャ	青森県ボッチャ協会
オンラインフライングディスクアキュラシー	青森県障害者フライングディスク協会
オンラインバスケットボール	高体連バスケットボール専門部



フライングディスク競技 (5校同時画面)



ボッチャ競技 (6校同時画面)



バレーボール競技 (2校同時画面)



バスケットボール競技 (2校同時画面)



講評

④ 開催後の感想等

ア 生徒を対象とした事後アンケート

大会終了後に参加した県立特別支援学校の生徒を対象に事後アンケートを実施した。その主な項目の回答内訳は Table. 9 となった。また、自由記述には、「すごく良かった。」、「毎年1回はやりたい。」などの肯定的な記述がみられた一方で、「アリーナに集まってやりたい。」などの参集型の大会を希望する記述や「映像が小さい。」などのオンライン大会として実施するための改善すべき点を示す記述もみられた。

Table. 9 事後アンケート回答内訳（生徒対象）

主なアンケート項目	回答内訳	
1. オンライン大会を楽しみにしてましたか？ (n=378)	楽しみだった	61%
	ふつう	32%
	楽しみではなかった	7%
2. 競技に参加してどうでしたか？ (n=265)	楽しかった	74%
	ふつう	22%
	楽しみではなかった	4%
3. 観戦してどうでしたか？ (n=377)	楽しかった	62%
	ふつう	34%
	楽しみではなかった	4%
4. 来年、スポーツ大会に参加したいですか？ (n=351)	参加したい	70%
	参加したくない	9%
	わからない	21%
5. 今後もスポーツを続けたいですか？ (n=409)	続けたい	70%
	続けたくない	4%
	このままで良い	26%

イ 教員を対象とした事後アンケート

教員を対象として実施した事後アンケートでは、「重度の障害で移動が大変なため、オンラインは望ましい。」「オンラインでも十分楽しんでいる生徒が多かった。」「オンライン競技で成立するものは継続してもよいと感じた。」などオンライン開催を肯定的に捉える意見が多数みられた。また「競技によっては、ルールの見直しが必要であると感じた。」「スクリーンで相手の様子を見ることは難しかった。」「タイトな時間設定だったため、他校の生徒同士が関わる場面が少なかった。」などオンライン大会を今後実施するに当たって、改善すべき課題となる意見もみられた。

一方で、「一堂に会して競技ができた方がよい。」など参集型の大会を望む意見もみられた。



体育館の様子

4 本事業の成果と課題

(1) 成果と課題について

各県立特別支援学校の取組、スポーツ大会開催の成果としては、大きく次の2点が挙げられる。

- ・特別支援学校に在籍している児童生徒のスポーツに対する意欲・技術・知識が向上し、継続的にスポーツに取り組もうとする態度が育成された。
- ・障害のある児童生徒の理解が深まり、地域のスポーツに関する活動への参加や地域ネットワーク形成のきっかけとなった。

特にインターネットを活用したオンラインスポーツ大会の開催は、障害の程度に関係なくスポーツ大会に参加することができる機会となり、重度の障害を有していてもスポーツに親しむ意欲の喚起につながったと考える。

一方、課題としては、以下の3点が挙げられる。

- ・地域のスポーツに関する活動の充実に向けた具体的取組。
- ・専門性の高い指導者（教員を含む。）の育成。
- ・視覚障害・聴覚障害特別支援学校生徒の参加促進。

これまでの取組により、少しずつ地域の障害に対する理解は深まり、学校と地域のネットワーク形成のきっかけとなってきたものの、各地域で障害のある者が安心して参加できるスポーツクラブ等の団体は少ないのが現状である。学校教育段階の取組を卒業後の環境づくりにつなげるためには、どのように取り組んでいけば良いのかが今後の大きな課題である。

(2) 今後の展望について

特別支援学校に在籍している児童生徒にとって、スポーツに親しみながら生活をしていくことは、余暇の充実だけではなく、体力の向上など健康な生活を送っていく上で必要なことである。今回指定した15校の特別支援学校においても児童生徒に対する意欲喚起の必要性は十分に感じており、全ての県立特別支援学校で取組の継続を希望している。今後も各校が取り組んでいけるように支援体制を整えていきたいと考える。また、青森県特別支援学校スポーツ連盟総合スポーツ大会については、今年度の取組を基本としながら障害の状態や程度に関係なく多くの生徒が参加できる大会を企画し、実施していきたいと考える。

地域によっては、地域統合型スポーツクラブなど障害者スポーツに取り組むことができる環境が整っている地域と整っていない地域があり、多くの地域は、障害のある者が安心して参加できるスポーツクラブは少ないのが現状である。これまでの取組で地域統合型スポーツクラブに限らず、各地域のスポーツ団体等とつながるきっかけは構築されたため、今後は、障害のある者が地域において安心して参加できるようなスポーツに関する環境づくりを目標に掲げ、地域の方々を学校活動に巻き込みながら、児童生徒が主体的に地域スポーツ活動に参加できるような橋渡しをしていく必要があると考える。

また、障害のある者が地域においてスポーツ活動に取り組むためには、家族の支援が必要不可欠である。各校での取組を児童生徒の様子も交えながら保護者に情報を発信し、休日等の家庭での取組につなげていきたいと考える。

県教育委員会としては、引き続き、総合スポーツ大会が児童生徒にとって目標

となり、夢の実現の場となるよう、一層、企画を練り上げていくとともに、障害のある児童生徒が継続的にスポーツに親しみ、生きがいをもち、健康に生活できるための基盤づくりに努めていきたい。